一通リ申入取肴三種吸物ニテ酒差出
候事

二月十六日　曇天
同　十七日　晴天
同　十八日　同

一
昼前泉屋九兵衛来リ此内御示談追
々両家申合せ折角明日ハ一同ニ御受
ニ罷出候積りニ御座候尤御利息之所ハ已
前より申上候通甚難渋之義ニ奉存候間
何卒此内被仰聞候より一朱増ニシテ六朱
ニ被仰付間敷哉と申候ニ付利足之儀ハ
此方ニテも往々(注)常に之目途無之而ハ御相談
も不相成義此度も元来三朱之御所
談ニ候処御六ツヶ敷御様子ニ付且々五朱
丈ケハ御利納相調可申哉と漸致吟味
候儀ニ候ヘハ此餘五朱ニテ御不調之儀ニ候ヘハ
致方も無之如何様ニシテも一朱増之詮議
ハ相調不申段相答候処左様之義ニ
御座候ハヽ先ツ其分ニテ今一応申合可
仕左候ハヽ落着ニ相成候ハヽ明日一同ニ御受
ニ罷出可申尤此度御約定之処を書
面ニシテ御取替仕度由申候ニ付致承知候乍
御面倒書面之処此内追々御約定之通
其方ニテ御調被下候様頼入九兵衛引取
候事
付リ　九兵衛より来ル廿日於難波新
地麁酒差出度御問どもハ無
之哉之段両家より与相(ヨリアイ)候由ニテ　（乞相か）
格別問筋無之段及返答
候事

二月十九日　天気

一
今昼後(すぎ)油屋小太郎泉屋九兵衛泉ヤ
十兵衛此内已来之銀談両家申合相談
通相決候ニ付右返答トシテ旅宿罷越候
猶決談書別紙之通相調持参ニ付見
合せ候処相違無之ニ付彼方ニテ相調候書
面ハ留置彼方ヘハ此方より相調一通相渡
候事
一
決談書面左之通

覚

一　当亥ノ年為替米代如例
千五百石分上納之外増高
五百石分当年中利息是迄
之通当暮勘定之上当亥
ノ年分不足高新出之廉
ニシテ月五朱之利足来子
ノ年より五ヶ年ニ割利且納
相調候事

一　未申両年分不足銀之内へ当
亥ノ年より年々生蝋百丸宛
差登候事

一　去戌ノ年不足銀へ当テ正金
弐百両并ニ生蝋ともニ帰国
次第当壱番船ニテ積登シ
候事

右之通今般登坂之上及
御決談候事

亥二月

一　油屋小太郎より年々御仕成米八拾目
和市(注)之儀内歎申出且泉屋九兵衛
へ御仕成之儀同人より内談ニ付帰国
之上可申合段申聞せ置候事

【注】和市＝相場・売買

二月廿日　雨天

一　今日泉屋油屋両家より招待ニ付いつれも
一同ニ難波新地へ罷越候事

同　廿一日　天気

一　此度御銀談済ニ付両家へ諸進物左之通

一　縞縮緬　一反　泉屋六郎右衛門

一　縞縮緬　一反　油屋彦三郎

但杉原包大水引認上ニ縞縮緬一反分相調熨斗包添

【注】杉原包＝こうぞを原料とした厚紙。奉書に似て薄くて柔い。杉原紙。

一　金一両也　油屋小太郎

一　金一両也　泉屋十兵衛

同

一　金一両也　　九兵衛
但杉原包ニテ上エ下タ折
懸中を水引ニテ相認上へ
麁酒料と相調候尤中
へ別封ニシテ金壱両と相調
候事

右之通相認今朝中村□泰一両家へ
差越品物引渡仕らせ候尚番頭とも
へも於両家ニ引渡居相無之分ハ相頼置
候事

付リ　本文御銀談済之上ハ両家本
人并番頭ともへ諸進物其外
御料理頂戴等被仰付候儀も凡
是迄之例も有之候へとも此度
之儀ハ素より出会事も万端
簡易之付会当時節柄
彼是以省略せしめ先記
ニ相不構本文之通差遣候事

一　今日三郎左衛門方翁輔暇乞トシテ両家へ手紙
六郎右衛門彦三郎相対いづれも菓子茶
差出候事
一　今昼後両家本人并番頭油屋小太郎
泉屋十兵衛泉屋九兵衛いづれも頂戴物
之御礼暇乞旁トシテ罷越候ニ付旅宿ニ於て
取肴四五種ニテ酒差出尚吸物仕立
二菜付ニシテ茶漬飯差出候事
一　坂田屋方旅籠料壱人ニ付日別四百
文宛之事

一　金壱両也　　坂田ヤ小七
右滞留中宿礼トシテ仕向相成候分尤
宿礼之儀ハ是迄之振相も有之事ニ候へ共
此度之儀ハ両家へも別段ニ振舞等も
無之出会事初中後旅宿付相之儀
故彼是諸事心配多リ儀ニ付前断之通
差遣候尚給仕下女等へも右へ準シ
少々宛之謝礼差遣候尤い細之儀ハ亥ノ
萩御銀子方御一紙之内ニ相見候事

二月廿二日　天気

一
富海入本屋船只様懸ケ留置滞留
日数不図長引候ニ付難渋申出候ゆへ
下地受相（うけあい）より壱両増ニシテ船運賃六両
壱歩船旅籠料壱人ニ付日別百八拾
文蒲団代壱枚ニ付四百文宛ニシテ仮受
候事
一
白八ツ（注①）（十四時）時乗船折柄雨天ニ相成
安治川橋上へ船を下ケ風待せしめ
候事
二月廿三日　天気
一
今朝六ツ（六時）時大坂川口出帆白九ツ半（十三時）時
家が嶋北方瀬懸リ暮過弥賀ノ沖（注②）
繋船之事

【注】①白白＝白（衍字）
②弥賀→八家

二月廿四日　朝之内曇天
西風
一
今朝五ツ（八時）時弥賀出帆白七ツ（十六時）時過播州
室着泊船之事
同　廿五日　曇天
北風
一
暁七ツ（五時）半時室出帆暮六ツ（十九時）半時讃州多
度津着船之事
同　廿六日　天気
一
白七ツ（十七時）半時多度津出帆高間ニテ潮懸
之事
同　廿七日　天気
一
今暁八ツ（三時）半時高間出帆白七ツ（十六時）時岩城
潮懸リ夜九ツ（二十四時）時同所出帆之事
同　廿八日　天気北風
一
白七ツ（十七時）半時室津潮懸リ折柄雨天ニ相成
同所ニテ泊船之事
二月廿九日　雨天
西風
一
今暁より西風強ク雨天ニ相成候ニ付室津ニテ
滞船之事
同　晦日　晴天
一
今朝八ツ（二時）時室津出帆白九ツ（十三時）半時富海（とのみ）
着船橋本屋富太郎方へ揚陸今夜止
宿之事
一
富海（とのみ）より先触駄荷馬弐疋駕籠夫六人
平夫四人明暁七ツ（五時）半時富海（とのみ）出立ニ

先触仕出シ置候事

三月朔日　曇天

一　今朝六ツ時富海（とのみ）出足白九ツ（十二時）時山口
ニテ昼食相認白（ひる）七ツ（十七時）半時佐々並土山
久七方着止宿之事

同　二日　雨天

一　金壱歩弐朱
一　半紙（注）弐〆　折紙
土山　久七
右去冬登り懸ケ上下拾壱人昼旅籠
尚又此度上下七人止宿両度宿礼へ対
差遣候事

一　今朝五ツ（八時）時佐々並出足ニテ白（ヒル）八ツ（十五時）半時一
同　達無滞萩御川屋敷へ着せしめ候事

【注】●半紙の数え方　一帖＝二〇枚　一束＝一〇帖　一〆＝一〇束　六束＝一丸　一弐〆＝四千枚
●御川屋敷＝益田家屋敷のこと（仮住居）

三月六日

一　帰着早速
御目見御用をも被為
聞召候筈之処当時御役中殊ニ当節
御用繁ニテ御間相無之漸今日夕方
三郎左衛門方翁輔
御目見被仰付引続冷飯栗山観之助
中村□泰
一　御目見相済左候而於
御寝所ニ当役中一同ニ被召出御銀談
済一条い細ニ被為
聞召当時勢ニ付而ハ大坂表も至而不融
通殊ニ近年相続候御勘定不足御不（ふかつ）
筈之趣ニも相成居彼是甚以難題之
次第ニ候処此度之御銀談筋程能（ほどよく）相調
被遊

【注】不筈（ふかつ）＝当然そうあるべき意を表す

一　前断ニ付三郎左衛門方翁輔先例之通り
御相伴御料理被下候筈之処当節別而
御用繁尚当御河屋敷御住居ハ眞之
御仮住居ニテ御座敷廻御式形チノ儀ハ
一向ニ不被相捌儀ニ付前断御会釈ハ被仰
付候道理ニテ相済候全以已後之例格

ニは不被仰付候事

付リ　中村□泰一儀ハ御台所部屋ニ
おいて御吸物御酒頂戴被仰
付後附市郎左衛門并ニ御付中間
両人へも於家務方ニ取肴ニテ
御酒被下候事
三月七日

一　三郎左衛門方翁輔
御前被召出御銀談一件懸苦労候ニ付
銀二枚宛折紙頂戴被仰付候段左之通
御意を以頂戴被仰付候事

益田三郎左衛門方
栗山翁輔

右旧冬俄ニ京都被召登
帰り懸ケ直様御銀談ニ付大
坂被差越候処前以御不足

益田三郎左衛門方

右旧冬俄ニ京都

被召登帰り懸直様
御銀談とシテ大坂被差越
候処前以御不足銀
相嵩甚難題之
御相談筋殊ニ当
時勢大坂表も一統
別而不融通之折柄
精々被相働誠以心配
行届候故程能御銀談
相調

御祝着ニ被
思召候右被為対苦労
銀弐枚折紙頂戴
被仰付候事

亥
三月

銀相嵩ミ甚難題之御相談
筋殊ニ当時勢大坂表も
一統別而不融通之折柄
精々被相働誠以心配行
届候故程克御銀談相調
御祝着ニ被
思召候右被為対苦労銀
弐枚折紙頂戴被仰付候事

亥
三月

三月十日

一　右一件相済今日御暇被下一達帰省候事
付リ　御付中間弐人只様長滞留
ニ相成時分柄添筋も有之
様相聞へ候ニ付帰萩両三日滞
留諸用相済シ暇遣シ宿許
差返候事

一　此度右一達御勘渡御立渡之次第ハ
当亥ノ萩御□銀□子
□方御一紙ニ相見候事

一　御銀談済ニ付□而
□ハ追而本人并ニ番頭
ともへ是迄ハ御会釈之仕登せをも被仰付
候先例ニ有之候得ども此度ハ両人滞留
中も諸事簡易之付会（付合）当時勢万端
無益之儀ハ双方用捨せしめ候儀ニ付左
ニ相見候通り挨拶之書状のミニテ相済
せ候事

本文杉原手紙調

一筆致啓達候温暖之節雖
御座候御全家御揃弥御堅栄
可被成御渡珍重奉賀候於当地

旦那被相易儀無御座次ニ下拙
とも無異議罷居候乍惶御休情
可被下候扨は先般罷登候節ハ段々
預御厚情殊ニ御叮嚀之御取
扱御礼難申謝忝奉存候将又
此度御頼談之一条不容易
御難題之筋偏ニ時勢切迫ニ
致頓着兼而之御懇命故渕
底及御熟話候処錦地之儀も
当節之模様取分御不融通
之御様子ニ候へども類外之御配
意を以御相談相調別而ハ利
安之御頼とも時勢をも不斗
一概之御歎ニ御座候処旧来之
御因不捨置御聞済段ハ一入候
御懇切之御取計以方帰着之上
縷々申聞せ候処尓今不始御懇
篤之程深忝被存候然上ハ此余

【注】●御歎＝歎願の意。ここでは強いお願い。
●一入（ひとしお）又は一个（いっけ）＝ひとり、一つ。

家政方相励追年勝手方
立直之目途相立度上下
挙而致太慶候就而ハいつれ書
中を以御挨拶可被申越候へ共
下拙ともよりも能々申置候様被申
事ニ御座候申も乍疎時下
御保愛専一ニ奉存候乍失礼
御家内様へも宜御致声頼存候
右積ル御礼御見舞旁為可得
御意如此御座候　恐惶謹言

栗山翁輔

四月朔日　名乗書判

益田三郎左衛門
同

油屋
彦三郎様

（注）本書格二

泉屋
六郎右衛門様

【注】格＝格式のある。二＝二人に当てて二通作成したの意

本書杉原手紙調

一筆致啓達候　温暖之節ニ
御座候へとも各様弥(いよいよ)御安清可被成
御座珍重存候拙者とも海陸
無障先月二日帰萩其後不
相替罷在候間御休情可被下候
先以滞坂中ハ段々願御取持
殊ニ御贈物御厚情忝存候扨又
此度及御熟談候一件不容易
御難題之筋ニ御座候処偏ニ各様
御働を以御頼談相調重畳忝
存候乍去(さりながら)其御地当時之形勢
ニ付而ハ至而御不融通之御入割
とも致承知候処尚又利安銀
等之御配意致御頼候段誠ニ恥
入候訳ニ御座候へとも其節も致
御示談候通内輪ニ而も危急ニ
相迫り候故前後も不顧及御熟
談候処兼而之御深志を以入々
御請合被下一統(注)相調候訳柄
の方が良い
御主人方御深切ハ不及申ニ
各様之御取計振之儀帰着之上
申合せ候処於年寄中も御懇
志之処偏ニ致感悦候此上弥
勝手方取締立直し之期肝
要之儀と何れも相励致太慶
候申も乍疎時気御用心
専一ニ存候右御礼御見舞旁
為可得御意如此御座候
恐惶謹言
四月朔日　栗山翁輔
名乗書判
益田三郎左衛門
同
油屋小太郎様
泉屋十兵衛様
泉屋九兵衛様

【注】一統→字は「一緒」だが意味は「一統」

本書中奉書調

一筆申入候　弥御無異珍重
之事候然者先般益田三郎左衛門
栗山翁輔其表差越難
題之儀及示談候処偏従来
之由緒を以程克聞済被給
之段委曲彼者共より令承知候
当時勢一統別而不融通之折柄
取分御分別被給乍尓今不
始儀御深切之至祝着不過之候
為謝礼如此候猶往々無疎意
様年寄共相談頼入候　恐々謹言

益田　弾正

五月朔日　　親施大御書判

油屋
彦三郎殿

本書格二

泉屋
六郎右衛門殿

本文杉原手紙調

一筆致啓達候　温暖之節雖
御座候弥御堅勝可被成御渡奉賀候
於当地　旦那無異儀被罷居
次ニ各不相易致消光候　然者
此方所帯向従来難渋ニ付而ハ
追々願御助力且々仕組（立）楯相
調是迄仮成取続御厚志之段
今更申も疎ニ御座候付而ハ
【注】仕組＝経済立直しの方法や行為。「楯」（立）はオモムキ
此餘御難題之被及
打続旅役被相勤殊ニ
昨年来京都滞留中之雑費
不大形実ニ当座之繰巻も
不相調次第ニ立至リ且ハ方今
之時勢彼是大ニ致頓着思召
之程も難御堪（注）想行無此上儀ニ
御座候へとも前断之難渋不得止事
【注】難御堪＝有難い
先般益田三郎左衛門栗山翁輔
途中ヨリ其表被差越無筋之

被及御示談候処旧来之御固不
被捨置主家安危之境御勘
察被成下一統不融通之御様子
ニ候へとも格別之御心入を以程克
御聞取被下候通両人より致承知其筋
旦那へも申聞せ候処重畳御厚
志之段不浅被致太慶候誠以
毎々之御懇切御礼難申謝全
貴家御分別を以追年勝手
立直シ之期ニも立至り可申哉ニ
挙而奉感佩候申も疎ニ御座
候得共時下御自愛専一ニ存候
右御挨拶為可得御意如此御座候
猶期後音之時候　恐惶謹言

大田　丹宮

五月朔日　　名乗書判

松本　良左衛門
右同断
増野　藤右衛門
右同断

益田　勘兵衛
右同断
益田　丹下
右同断

泉屋
彦三郎様
泉屋
六郎右衛門様

本書杉原手紙調

一筆致啓達候　温暖之節ニ
御座候へ共各様御堅勝ニ可被成
御暮珍重存候然者此方所帯
向従来難渋ニ付而ハ追々御両家
御助力を以仕組楯相調来候内
近年打続旅役被相勤殊ニ昨年
来京都滞留中之雑費不大形
弥増難渋ニ立至り当座之繰巻
も不相調次第且ハ方今之時勢
彼是大ニ致頓着毎々之御難題
御存入之程も難御堪次第ニ御座候へ共

実ニ進退相迫り不得止事先般
益田三郎左衛門栗山翁輔其表
被差越無筋之及御相談候処
勿論下地之参り懸リへ引添
何とも不相調儀ニ御座候処偏ニ
各様御入せまり御出精被下候故
程克御示談相調両人帰国
之上右御駆引之次第逐一致
承知御主人方御心入之段ハ不
及申各様格別之御取持ニテ
御聞済相成候儀と重畳忝
致感悦候就而ハ此餘弥勝手
方取締追年立直シ之期肝
要之儀と挙而被相励幾重ニも
御厚志之程不浅忝存候不能申（もうすにあたわず）
候へ共随時御保護専一ニ存候
右為御挨拶如此御座候猶期（こうおんをきし）
後音候　恐惶謹言

【注】下地＝物事をなすための、また或る状態になる為の基礎となるもの。

大田　丹宮
五月朔日　名乗書判
松本　良左衛門
右同断
増野　藤右衛門
右同断
益田　勘兵衛
右同断
益田　丹下
右同断

油屋
小太郎様
泉屋
十兵衛様
泉屋
九兵衛様